

修士論文(要旨)

2012年1月

青年期の対人恐怖心性と自己愛傾向について  
—「幼児期の両親の養育態度」と「甘え」の観点から—

指導 井上直子教授

心理学研究科  
臨床心理学専攻  
210 J 4001  
岩田智美

## 目次

はじめに

第1章 問題の背景と所在	1
第1節 青年期心性とその発生要因について	1
第2節 対人恐怖と自己愛の関連	6
第3節 問題の所在	15
第2章 本研究の意義と目的	15
第1節 本研究の意義	15
第2節 本研究の目的	16
第3章 方法	16
第1節 調査対象	16
第2節 調査方法と手続き	16
第3節 尺度	17
第4章 結果	19
第1節 測定尺度についての検討	19
第2節 PBI、「甘え」尺度、TSN-Sにおける各因子間の相関分析	25
第3節 TSN-Sにおける5類型の分類	26
第4節 各類型の幼児期の両親の養育態度に対する認識と甘え欲求の処理方略	27
第5章 考察	30
第1節 TSN-Sにおける2因子(「対人恐怖心性」「自己愛傾向」と各因子の関係	31
第2節 TSN-Sの各類型における特徴	34
第3節 総合考察	40
第4節 本研究の問題点と今後の課題	42
第5節 終わりに	43

謝辞 44

引用文献

資料1 アンケート調査実施依頼書

資料2 調査質問紙

## I. 問題と目的

対人恐怖心性とは、自己愛傾向とともに、自己に関心が向かう青年期において高まりやすく、両指標各々を個別主題とする研究が数多くなされている。対人恐怖心性とは、「対人恐怖の傾向である人見知りや過度の気遣い、対人緊張」(清水・海塚,2002)であり、自己愛傾向とは「自分自身への関心の集中と、自信や優越感などの肯定的感覚、さらにその感覚を維持したいという欲求」(清水・海塚,2004)である。これらの青年期心性が高まる要因としては、「幼児期の両親の養育態度」や「甘え」との関連から検討されてきた。しかし、両心性の高まりと関連のある「幼児期の両親の養育態度」について、まだ一貫した知見は得られていない。そこで、幼児期の両親のどのような養育態度が両心性に影響を与えているのか検討することは、青年期心性の形成を理解する重要な知見となりえる、と考えられる。そして、玉瀬・相原(2005)は、「甘え」の実証的研究は、日本人の対人関係の特徴を理解する上で重要であり、カウンセリングや心理臨床の実践にも有益な示唆を与えうる、としている。また、谷(2000)は「甘え」は単に乳幼児の問題ではなく、青年期における社会的文脈の中での「甘え」欲求の処理が問題となると述べている。そこで、「甘え」については、幼児期の甘えというよりも青年期における甘え欲求の処理方略について考慮した研究が、心理臨床場面における青年期の治療的アプローチへの重要な知見をもたらさうと考えられる。

そして近年、両心性は同様の発生メカニズム、発生要因を持つことから関連のある青年期心性として捉える必要性が報告され、これに適した実証モデルとして、対人恐怖心性と自己愛傾向の高低から青年期心性を5つのサブタイプに分類することができる、対人恐怖心性－自己愛傾向 2次元モデルが提唱された。そこで、本研究では、このモデルを用い、「幼児期の両親の養育態度」に対する認識や、現在の「甘え」欲求の処理方略との関連から各サブタイプの特徴について検討することを目的とする。

## II. 方法

調査は、2011年5月～6月にかけて、首都圏の私立大学に通う大学生(18歳～23歳)518名(男性142名、女性376名、平均年齢19.7歳;SD=1.16)を対象に質問紙法を実施した。なお、質問紙は一斉配布し、後日回収した。使用した尺度は、①日本語版 Parental Bonding Instrument (PBI)(小川,1991)、②「甘え」尺度(谷,2000)、③対人恐怖心性－自己愛傾向 2次元モデル尺度短縮版(TSN-S)(清水・川邊・海塚,2008)である。

## III. 結果と考察

本研究では、現代の青年期において「過敏特性優位型」と「誇大特性優位型」に分類される者が多いことが示唆された。すなわち、最近の大学生は強い過敏特性を全面に示す者と誇大特性の強さを示す者との両極端が存在することが明らかになった。強い過敏特性を持つ「過敏特性優位型」と「誇大－過敏特性両向型」は、幼児期に両親が冷淡で、過保護な養育を受けたと認識しており、現在、甘え欲求に対し3つ全ての処理方略をよく用いるが、とりわけ「とらわれ」の方略を用いていることが分かった。谷(2000)は、3つの方略のうち「とらわれ」が最も「対人恐怖」との関係が強いと指摘しており、本研究でも「とらわれ」と「対人恐怖心性」との関係が最も強いことが示唆された。すなわち、過敏特性の強いタイプは、対人恐怖との関連が高く、精神的健康度も低い状態にある可能性が考えられる。一方、強い誇大特性を持つ「誇大特性優位型」は、両親が愛情深く、自立性や自由さを尊重して養育されたと認識しており、甘え欲求に対して3つ全ての処理方略をあまり用いていないことが分かった。さらに、「誇大－過敏特性両向型」や「過敏特性優位型」と比較して、

「とらわれ」の方略を用いていないことが示唆された。したがって、本研究で「誇大特性優位型」に分類された大学生は、「誇大－過敏特性両向型」や「過敏特性優位型」に分類された大学生よりも、対人恐怖との関連が低く、精神的健康度も保たれている可能性が推察される。

「誇大－過敏特性両貧型」と「中間型」は、幼児期に両親から比較的バランスの取れた養育を受けたと認識していることが分かった。そして、「誇大－過敏特性両貧型」は「誇大特性優位型」と同様に、3つ全ての方略をあまり用いておらず、「誇大－過敏特性両向型」や「過敏特性優位型」と比較して、「とらわれ」の方略を用いていないことが示唆された。よって、本研究で「誇大－過敏特性両貧型」に分類された大学生も、「誇大特性優位型」に分類された大学生と同様に、対人恐怖との関連が低く、精神的健康度が保たれた状態にある可能性が考えられる。

以上のことから、大学生の精神的健康において強い過敏特性を持っていることが問題となると推察される。そして、幼児期の両親の養育態度に対する認識の観点から検討すると、両親が過保護で、なおかつ情緒的に冷たいことが他者評価に敏感な過敏特性を形成し、対人恐怖心性を高める要因となると考えられる。また、甘え欲求の処理法略の観点からすると、過敏特性が強く対人恐怖心性が高い者ほど、「とらわれ」の方略を用いていることが推察される。

本研究で得られた結果は、さらなる検討や考察を深める必要があるが、現代の青年期において過敏特性の強い者が臨床の対象となる可能性があり、彼らが幼児期の両親の養育態度に対して否定的な認識を持っているということ、また、現在の対人関係においても甘え欲求を上手に表出し、処理できていないということを理解できたことが、臨床現場において彼らと接する際の基礎的情報として役立つのではないか、と思われる。

## 引用文献

- 小川雅美 1991 PBI(Parental Bonding Instrument) 日本版の信頼性, 妥当性に関する研究 精神科治療学, **6**(10), 1193-1201.
- 清水健司・海塚敏朗 2002 青年期における対人恐怖心性と自己愛傾向の関連 教育心理学研究, **50**(1), 54-64.
- 清水健司・海塚敏朗 2004 青年期における対人恐怖心性と自己愛傾向の基礎的研究 広島国際大学心理臨床センター紀要, **3** 23-32.
- 清水健司・川邊浩史・海塚敏郎 2008 対人恐怖心性ー自己愛傾向 2次元モデルにおける性格特性と精神的健康の関連 パーソナリティ研究, **16**(3), 350-362.
- 玉瀬耕治・相原和雄 2005 相互依存の甘えと思いやり、屈折した甘えと自己愛的傾向 奈良教育大学紀要, 人文・社会科学 **54**(1), 49-61.
- 谷 冬彦 2000 青年期における「甘え」の構造 相模女子大学紀要, A,人文・社会系 (63A) 1-8.